

源信・法然・親鸞

金子大栄

一

法然は浄土教の創立者である。日本に於てではない。仏教の歴史に於てである。従来とても往生浄土は願われておらなかったのではない。念仏して浄土往生を願う。それは聖道としても当然のこととも思われたのであった。しかるに浄土教はその聖道の外にあるものでなければならぬという。それが法然の絶叫であり唱導であった。まさにこれ仏教思想界の革命ともいふべきものである。しからば、何が法然をしてそうせしめたのであろうか。

二

それは恐らく法然の人格であり、出家の動機に依るものであろう。父親を殺した怨敵の前にして仇討を許されない。その解け切れないままでの出家である。俗界を離れて静かに学問するというようなことは、武士気質として初めからできないことではなかったであろうか。

聖道を満足する為の往生浄土、かえり見れば自分の求めているものはそのようなものではなかった。怨親の彼方なる浄土の往生、それこそ人間の要求しているものではないか。それこそ凡聖善悪をえらばない仏法であらねばならない。山林に閑居して学問する、それが聖道ならば、法然はその聖道を捨てて、改めて浄土の法を求めねばならない。

それこそ群生としての人間に要求されているものではなかったか。

三

されど法然をして浄土教独立の宣言に踏み切らしたものは善導の教書であったことは間違いない。『一向専念無量寿仏念々不捨者は名正定業順彼仏願故』の言葉に感泣して『予が如き愚悪の凡夫のために』と廻心せるのである。偏依善導一師ということは、この時から決定せるのであろう。されどその決定の傾向は早くからあったに違いない。『観経疏』は始めから心惹くものありて、法然は幾度も読み、遂に廻心の決定となったのである。それは善導に説かれてある浄土教こそ法然の要求するものであったということである。

それは何よりも善導の人間観である。『観経疏』を見れば、善導はいかに人間生活の浅間しいものであるかを知っていたかが察せられる。その人間は手を執りあつて共に道を求むべきものではない。それは何うすることもできない罪惡深重のものであり、煩惱熾盛の衆生である。いかにしてもわがゆく道を妨げるものであつて助けとなるものではない。浄土への道は四五寸であると感ぜしめているものは愛憎の水火ではないか。その人間は聖道の外に浄土を求めしめられているのである。

四

特に法然をして偏依の感情を深めしめたものは善導の自信力である。自分は『観経』を解説する。それは古今の謬りを楷定するためである。それは、一僧指授のものだから一字一句も加減されてはならないという。何という自信の強さであろう。その信念から七深心・六決定ということも展開されたのである。そして最後の第七深信では就行立信・就人立信を開き、その就行立信では正行・雜行を分別し、更に五正行に於て助業と正定業とを規定せられた。そ

それは謂わば、往生人の資格の精密検定である。それは何か知らん恐ろしく近づき難い感じもするものではないであらうか。されどこの精密検定に合格せるものは疑いなく往生する。この事実はいかなる賢人も聖者も破壊することができない。たとえ仏菩薩ありてこの道を否定しても動揺するものでない就行立信である。

こうして偏依善導に依る法然の浄土教は成立した。その著『選択本願念仏集』は全く善導の『観経四帖疏』の撮要である。

五

されどそれにも拘わらず、法然にも無視することのできなかったものは源信の存在であった。

その『往生要集』は念仏一門に依りて浄土の要文を集められたものである。されどその集められたる要文は全仏教であり八万の法蔵である。したがって往生浄土すなわち聖道であることは言うまでもないことであった。その念仏に於ける仏とは阿弥陀一仏というようなものではない。諸仏阿弥陀である。その念仏に於ける念は称名に限るものではない。観念も想念も念仏である。念称は一であるということは観念称名、別はないことである。

こうして『往生要集』の正修念仏では天親の五念門を挙げて、すべてを三業相応して行ぜらるべきものとせられてある。その内容を見れば天台の止観行と変えることはない。しかれば観心というも観仏と別なものではないのであろう。ここに念仏というも念と仏とを分つものではなく、能念所念性空寂である。

特に助念方法に於ける周到なる実践、修行の用意は、ここに恵心流天台といわれるものがあるのかも知れない。われらは浄土への法を尋ねて全仏教に遇えるのである。

ここにはいかなる求道者といえども『往生要集』を無視しては往生浄土を説くことはできないものがあつた。

特に忘れてはならないことは、『往生要集』に於ける最初の二章、厭離穢土・欣求浄土ということである。率直に言えば地獄・極楽ということである。

仏教といえば地獄・極楽を説くもの、それを語らないものは真宗ではない。今でもそう思うている人がある。それ程までに『往生要集』の説が普及した。しかしそれ程までに信仰せられた地獄極楽の説は必ずしも日本人の自覚となり思慕となつたわけではない。多くは地獄恐怖ともいふべきものである。私たちにしても少年時代に植えつけられたものは、地獄恐怖であつてその業因である悪業の反省とか自覚というようなものではなかつた。その恐怖が罪惡に怖のかしめたのである。それは恐らく源信その人に取りても同様のものがあつたのではなからうか。

文学の家に生れ、横川谷に学問せる源信である。その記録せる地獄は少なくとも源信その人に取つては、八大地獄それぞれ人間の罪業を象徴してのものに違ひはない。そう了解するのが良心的であらう。その点から源信の文学的才能を尊重し、その地獄観を明らかにしようとする学者はあつた。私はその人々に十分に敬意を払わざるを得ない。そしてその視点からそれぞれの地獄の着想を見ることが出来る。されどそれは案外少部分であつて、多くは焦熱・大焦熱、叫喚・大叫喚というようなものである。もえる／＼、さげぶ／＼、何の意味もない。思えば何の意味もない苦惱、それが地獄ではないか。

そうなると唯一つ思い合わされるのは、平安末期の日本である。餓鬼や畜生は、なおその因果を諦めることができる。地獄に至りては諦める道もなく唯だ燃え、唯だ叫ぶのである。したがつて、それはただ恐怖であることは当然ではないであらうか。『往生要集』は名著であるに違ひないが、創作ではなく編集であつた。地獄篇もすべては諸経か

らの集録である。

こうして厭離穢土は惣べての人の心を執えたが欣求浄土はそれ程までに求道心を喚起するものとはならなかった。浄土十案に於て源信は聖者に帰れるのである。聖衆俱会の衆という如き、特に聖道的のものではないか。

七

さらに『往生要集』には、もうひとつ凡人的なものがあつた。それは臨終正念を願われたことである。特に臨終行儀を詳説している。その通り実行せられたに違ひはない。「迎い講」というものも作られたということである。これは善導の精密検定已上に往生の決定を実際的に確かめようとするものではないか。地獄を恐怖するものの当然の態度である。その地獄恐怖も臨終来迎を待つこともそのままに法然に継承せられている。しかしそれならば源信も法然のように聖道を捨てて浄土門に帰すべきではなかったか。

しかれば『往生要集』は広く聖道をも念仏一門に摂めてはあるが、源信の實踐に於ては称名念仏に外なかったであろう。法然はそれを『往生要集』の「往生之業念仏為本」の語に見出した。そしてそれを『選択集』の標語とせるのであつた。そしてそれが『選択集』を権威づけることとなつたのであろう。

しかれば『往生要集』に於ける正修念仏、助念方法等の説はいかに了解すべきであらうか。畢竟これ横川谷に隠棲せる聖者の自受法案であつたのであろう。それはそれとして十分に尊重することができる。されど法然に実行せられるものは「もろこしわが朝にも、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる、観念の念にもあらず、又学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがひなく往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の子細候はず。……」である。それは法然の起請をかけてのものである。これ即ち『往生要集』を批判せるものではないか。ここに一方では源信を継承し、一方では『往生要集』を批判して法然の唱導が成

立したということではないか。

八

その法然の教化によりて「雑行を捨てて本願に帰する」親鸞である。しかれば親鸞の説くところは法然の教うるものと全く同一であらねばならない。それにも拘らず『選択集』の説くところと『教行信証』等に顕わしているものは異なる感じを与うる。何故であろうか。

これは容易ならぬ問題である。私は先ず法然にありて偏依善導であったことが、そのまま親鸞のものとはならなかったことに着眼したい。「善導源信すむとも、本師源空いまさずば」という。そこには偏依善導であることができなかつた何ものかが親鸞にあったのであろう。しかもそうあらしめたものは偏依善導の法然であつた。

ここでは法然が偏依善導であつたと同じように親鸞は偏依法然であつたかということが問題となる。若し偏依法然であるならば七高僧の説を尋ねる必要はなく、釈尊の説教も特に『観経』を重んずべきであつたかも知れない。しかるに「真実の教を顯はさば、則ち大無量寿経是れなり」と説きて七高僧の領解を述べ、「斯の高僧の説を信ず可し」と勧めてある。ここにはいかにしても偏依法然とは言えないものがあるのではないか。

九

これは佐々木月樵先生に教えられたことである。「真宗の行者には必ずこの人に依りてという一人の善知識があらねばならない。しかしそれはやがて何人のお説も有難いということに出ねばならぬものである。それは恰も禅と反対のように思われる。禅では初めから何人のお悟りも結構である。されどその奥義となれば必ず面授口訣の禪師がなければならぬ。」と。

これは恐らく否認のできぬ事実であろう。禅家のことは暫らく擱いて真宗は確かにそうである。しからは真宗には何故にこの人によりてというようなものがなくてはならぬのであろうか。それは入信は廻心であるからである。真宗を信ずるとは今まで無関心であったものが関心をもつようになった、あるいは誘ってさえていたものが今は信心するようになったというようなものがなくてはならない。それは惣べての宗教はそうであるといわれるかも知れないが特に浄土教になくてはならぬものである。何故ならば、浄土教は自力をひるがえして他力に帰するものであるからである。

その方向転換は即ち廻心である。そして自分に取りてその方向転換は、あの頃、あの師教に依りてということである。それが親鸞にありては「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雜行を棄てて、本願に帰す」という記録となり、更に『選択集』を附属せられた感激となっている。それは何といても、親鸞の偏依法然であったといわねばならぬものではないであらうか。

廻心とは自力を棄てて本願に帰することである。それはただ一度びあることである。そしてそれは必ず一度はあることである。

一〇

しかるに親鸞は更に広く浄土の経釈を披閲することになった。それは恐らく師教の真実の普遍性を明らかにせんがためであったであらう。師教は私すべきものではない。公開の真実である。そのことを顕開するために『教行信証』は製作せられた。

その「教巻」には「夫れ真実の教を顕はさば、則ち大無量寿経是れなり」という。どうしてこの経が真実の教であるか。それに答うるものはこの経は本願を宗とし名号を体とするからである。されどどうして本願を宗とし名号を体

とすることが真実であるか。それに答うるものは『大無量寿経』の教説であるからということであらねばならない。そこに『大経』というものの意味があるのではないであろうか。

ここには「初めに大無量寿経あり」といったようなものがある。その初めは言うまでもなく歴史的時間の始めではない。仏教の歴史を成立せしめた始めである。即ち終りなき初めである。それこそ永遠真実なるものということである。したがって法然の偏依である善導の教説も、それが順彼仏願故といわれるかぎり、その仏願は『大経』に依りて明信せられるものでなくてはならない。そうでないと法然の唱導も普遍性のないものとならぬであろうか。それが親鸞に取りては遺憾のことであつた。

一一

これに依りて親鸞は、更に七高僧の教説を聞くこととなつた。畢竟、法然の教の特殊性の上に普遍的意義を見出さるゝんがためである。それは、法然の教の中に含蓄せるものを公開し顕彰することとなつた。

これを思想形式より見れば七祖の説くところは『大経』と『観経』との対応である。そこに明知せられることは、浄土を願うべきは一切の衆生であつて、特に愚人とか悪人とかいうものではない。すべての人間は愚悪の衆生である。それがどうして聖道は賢者の法、浄土教は凡夫の道と区別せられて、浄土を願う者に劣等感を懷かせることになつたのであろうか。或は地獄恐怖と同じように、源信の「予が如き頑魯のもの」や、法然の「予が如き下機の輩」ということが言葉通りに受け容れたのかも知れない。『観経』の下々品も、そうあらしめたのであろう。祖師たちの言ひ願わそうとせられたものは人間生活の底を挙げて、すべての人間の救われる道を明らかにするものであつた。私は今日まで多くの知人から、「何故に念仏に専一なることができず禪をも行われるのであるか」という問に対して、「自分は愚夫愚婦ではないから」とか、「自分は学者であるから」という答を得て啞然とせることである。そしてそれが一

日の禅修行にも優越感を懷かしめ、一生の念仏者に卑小感を離れ得ざらしめているのではないであらうか。

一一一

されど、その思想の根底には仏教は出家の法であるという伝統的信念があるようである。いかに浄土教は出家・在家を簡ばないといっても、それを実証するものは出家の僧侶である。したがって真実に浄土の教は出家・在家を簡ばない法であることを実証するものは出家よりも在家であらねばならない。それが親鸞の妻帯という事実によって実証せられたものであった。

それは浄土真宗を知ることによって忘るべからざることである。されど親鸞をして本願念仏の法は真に一切衆生の道であることを深信せしめたものは、越後より関東への流浪であった。都住居の知識人のものではない。名もなき民艸といわれている田舎の群生である。まことに、その意味に於て愚悪感を離れることのできぬのが群生の真心というものである。そしてその「一切群生海のこころ」こそ本願を信ずる正機ではないか。

したがって如来の本願も、この「一切の群生海の為に」のものである。この法は一人の為のものではない。百人千人の為のものではない。乃至無量無数の人の為ではない。一切群生の為のものである。その現実には諸有の衆生の為にあるものである。それでなければ何人も信ずることのできぬものである。一切群生の救われる法なるが故に法然も「予が如き下機の輩」の為にと感激することもでき、親鸞も「偏へに親鸞一人が為なりけり」と領解することができたのである。

一二二

しかれば本願を信ずることは、求道者の自己決定ではなく、本願力の廻向に依るものであらねばならない。そのこ

とは先ず『大経』の所説に於て感知せられる。如来浄土の因果によりて衆生往生の因果は成立する。これ即ち往生浄土の行信は法蔵願力の廻向であるということではないか。その意味に於て曇鸞の廻向論は特に親鸞の心を惹くものとなった。親鸞という名告りもそれに依ることである。

されど、それを深信せしめたものは、天親・曇鸞のみではない。七人の高僧の説くところも、それより外ないのである。恐らく親鸞をして「どなたの教も有難い」と思わしめたものは、この七人には限らなかったであろう。「行巻」には憬興、元照等の多くの高僧の説が挙げられている。しかし特に七人の高僧の説を信ぜよと勧められたのは、明らかに弥陀の本願は一切群生の為のものであることを説かれたのが七人に限るからであらねばならない。

したがって七祖の選定は、七祖の上に師資相承というようなものがあつたからではない。若しそういうものがあるとすれば、ただそう感ぜしめるものがあるということである。事實は「三国の高僧おの／＼この一宗を興隆す」であつた。

しかれば本願力廻向の信心ということとは法然の上にもあつたことは言を俟たない。「わが信心も、善信房の信心も如来より賜はりたるもの」と語られた。そのことを特に痛切に感ぜしめるものは『選択集』に於ける如来選択の願心である。易にして勝なる称名を以て往生の業と選ばれたことは、一人をも漏らすまいという大悲の願心に依ると説かれた。これは即ち母が何を為そうともわが子のためという心を離れることのできぬようなものである。それは言い換えれば何事も何事も子へと廻向されているということである。これ即ち廻向心は選択の願心に内在し、それが現行して念仏の行信となることである。

こうして親鸞は法然から出発して法然へと帰れるのであつた。

ここで残された問題は信心を決定せしめたものは本願力の廻向であるか、求道者の廻心であるかということである。恐らく、願力の廻向でなくては行者の廻心ということも成立せぬことであろう。されど行者の廻心なしには本願の廻向というも領受されない。したがって真実の信心は正に廻向と廻心との値遇であるというべきであろう。しかしその値遇はいかにして成立するであろうか。

その値遇は偶然か必然か。遇とはもうあふという。もうあうとは信ずることである。「遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり」、その喜びに於て『教行信証』は製作せられた。その前四巻は廻向の巻であり、第六巻は廻心の巻である。そして第五の「真仏土巻」は恐らく、両者の値遇を可能ならしめるものは何かということを明らかにするものであろう。

一五

ここで私は親鸞に依りて始めて明らかになることを挙げて結論としたい。その第一は浄土願生は正しい人生観であるということである。それは現世を厭惡せしめるものではなくして、かえって現世の光となるものである。それは「臨終待つことなし、来迎たのむことなし」という説にも現われ、正定聚、必至滅度を信心の利益とすることにも明らかにせられた。浄土を願うことは必獲現生十種益の道であるからである。恐らく現世利益ということすらも、その心にて受容せられたものであろう。

厭離穢土を先とするは聖道門である。本願念仏の法は欣求浄土を先とするものでなくてはならない。伝教の「願文」を読み、道元の『学道用心集』を見れば、聖道の菩提心は専ら厭世観の上に立つものであることが痛切に感ぜられる。そこに何かがある。その孤高なる気品、そしてその人によりて為された種々の仏事、それがその人を聖者として崇敬し、その仏事に随喜せざるを得ぬのである。それこそ群生の愚直なる心情ではないであろうか。

しかるに親鸞にはそのようなものが感ぜられない。尤も九歳の童子の出家である。その人の出家に果して自発的のものがあつたであろうか。ただ親属の人々の勧めに依りて喜び素直に得度せられたとも考え得るのである。いずれそれは親鸞伝研究者によりて明らかにせられることであろう。されど少なくとも著作に於ては厭離穢土ではなく欣求浄土である。その浄土は世の住みにくきを悲しむ心から求められたものではなく、人間生活を人間生活であらしめるいわば魂の郷里として求められた。しかれば人生は現世より来生であるに違ひはないが、そうあらしめるものは浄土より現世へである。

一六

したがって第二に明らかなることは、浄土真宗は正しき人間観であることである。已にいうように一切の群生海といい、濁世の群萌といつても、その外に聖道の行人があるということではない。民艸といえ上つ方があり、田舎者といえ都人士があるように、往生人といえ聖道の行人があるように思わねばならぬのではないであろう。

今日といえども、歌を学ぶことは歌道であり、医を習うことは医道であるに違ひはない。学問は学道であり、政治は政道であらねばならぬ。したがってそれぞれの道の達人は、選ばれた人であり、乃至それぞれの賢聖といつてよいのであろう。されどそれらは惣べて群生としての人間に認められてあるものではないか。

しかれば聖道の外に浄土教ありということは、浄土教の外に聖道ありということではない。かえって浄土教ありて聖道ありということであらねばならない。そのことは上来、幾度も繰返せることである。しからば何故に浄土教徒は群生といい、特に煩惱具足の凡夫といわれねばならぬのであろうか。それは如来の本願を信ずるものの正しい人間観であるからである。